



巻頭言

理科への興味と科学する心

(財)日本植物調節剤研究協会
評議員・北海道支部長

藤村 稔彦

近年、子供達の自然科学に対する興味が薄いように思う。2002年には我が国で初めて、ノーベル賞に二人の科学者が選ばれるという快挙となったのに、である。

実際の生活の中で、どれだけ科学技術の恩恵に浴しているかは計り知れない。例えば、かつては自動車の運転に故障は付き物だったので、その構造をよく理解していなければともに運転できなかった。しかし、現在は機械の信頼性が向上するとともに、電子技術で機械を制御することにより、運転中の障害は大幅に減少した。だから、構造などは知らなくても大きい支障はないのだろう。

私が理科という科目は面白そうだと感じ始めたのは、勉強など殆どせず友達と一緒に戸外で遊び回っていて、動植物や天気などに興味を持ったためだと思う。虫や魚を捕まえたり、野の花をちぎったり穂を抜いたり純粋な遊びであり、その中で驚いたり面白がったりを重ねてきた。理科（自然科学）は再現性のある一定の法則に基づく学科だから、基本を理解すれば、関連事項についても理解しやすいのが取り柄であり、勉強も特に苦労とは感じなかったように思う。

今、何故理科嫌いなのか理由は判らないが、受験に向けて理解する暇もないまま、ただ暗記させられる学習の形態や、外での遊びが減らざるを得ない環境にもあるように思う。

無（減）農薬や有機農産物が良いのだという漠然とした意識が、大きいうねりとなって押し寄せているが、根拠は必ずしも明確ではなさそうだ。特に、これらの農産物はおいしいという評価は、噴飯ものであり根拠は薄い。

農薬の使用はコストの面からも環境に及ぼす

影響等からも、必要最小限に止めるべきであることは論を待たない。また、カーソンの沈黙の春（Silent Spring）を無視するものでもない。世の中に絶対に安全というものはないことを肝に銘じつつ、必要のある資材は使わなければならない。

昨年9月に、野菜供給安定基金の委託を受けて、植調協会が調査し取りまとめた「野菜作用植物成長調整剤等安全情報等調査事業」報告書にも、「…多くの消費者が農薬についての認識が浅薄で、農薬の安全性が使用基準を遵守することで担保できるという前提を理解していないか、（中略）疑っていることによると推察できる」とし、「農薬の安全性について理解を得る機会を作ることが必要」と結んでいる（同書P.4）。

冷静にこの事実を受け止め理解するためには、科学的な考え方が不可欠である。基本的には、結果がどのような原因に基づいているかを知ろうとする意欲と、その現象は条件が整えば再現性があるだろうか、という感覚を持つことであろう。このことはマスコミなどの取材にも通ずるのだが、ジャーナリストも全てがこのような感性を持っているとは限らないようだ。その結果、マスコミにも再現性が疑われるような記事が流れることになる。

学校でも日常生活でも、科学する心が育まれるような条件を整えるよう、いろいろな場面で働きかけるようにしたいものである。その積み重ねで冷静な判断ができるようになれば、農薬の必要性についての理解も深まるだろうし、'93年の冷害のときのコメパニックや、BSE騒ぎの際に牛肉消費が極端に減少するなどの騒動も、なくなるのではなかろうか。